

片柳栄一『知と疑と信』に対して

神崎 繁

まず質問に先立って、片柳氏の論点を、私の立場から要約し、それに基づいて質問してゆくこととしたい。

氏は、第一書簡における「アカデメイア派の人々は、巷間そう信ぜられているのは遙かに隔たった考えをもっていた……従って私は、彼らを攻撃するというより、むしろ模倣した」という一文を捉えて、そこから、次の過程で議論を展開されていると思う。

- (1) アカデメイア派はアウグスティヌスに自由な探究の可能性を開示した。
- (2) 不知であること (stultus) の承認と *probabile* からの探究の開始を提起した (探究の端初と展望)。
- (3) アカデメイア派の懐疑論者は、現象世界と真実在の二世界説を持っていた。
- (4) アカデメイア派を模倣したというのは、この真理への関わりを示すものである (探究の終端)。
- (5) アウグスティヌスの懐疑論の克服という問題は、Scheinproblem である。

このうち (1) に関しては、かつて初期対話篇についての論考に、『自由意志論』から *prima quaerendi libertas* という語を選んで、主題とされた論者ならではの着手として首肯される。しかし、そのような自由な探究をその端初において可能とするのは、言わばソクラテース的「不知の自認」と、真理の発見・知の獲得を *probabile* とすることとであるとするとする論点 (2) には、賛成できない。また、懐疑論者における隠された教説という (3) の論点は、確かに『アカデメイア派論駁』末尾におけるアウグスティヌスの哲学史の見解として問題となることであるが、これは真理の探究をその終端において保証するものではない。従って、アウグスティヌスが、アカデメイア派を模倣したと述べる時、このような真理への関与を述べているとする論点 (4) にも同意できない。この両者、すなわち (2) と (4) は、ともに質問者の解釈では、アカデメイア派に対する対人論法に関わる問題であって、真理の探究の可能性をめぐるもので

はないと考える。従って、(5)の結論にも残念ながら同意することはできない。以下、議論の中心となる(2)および(4)の論点に関して、不賛成の理由を述べ、別の解釈の可能性を提案したい。

(2) の論点に関して

岡部由紀子氏が提起されて明らかとなったように、*stultus* の自認が、アカデメシア派の批判に対して持つ意義は大きい。質問者は、そのソクラテース的含意を否定するものではないが、しかし、これは差し当たって、*sapiens/stultus* のストア的二分法を背景として読むべきであると考え、つまり、*stultus* である自分（アウグスティヌス）ですら知っている（*scire*）事柄がある。とすれば、*sapiens* が *sapientia* を知っているのであれば、アカデメシア派の知者は愚者と変わるところがない——という批判は、この二分法に基づいているからである。たとえば、『ソリロキア』において、

R: では答えなさい。幾何学における線分が少なくとも何であるかということを知っているか。A: そのことなら、はっきりと知っています。R: そのように明らかに言って、アカデメシア派の連中に対して気が咎めないか。A: いや全く。というのも彼らは知者が過つことをうべなわなかったのですが、私は知者（*sapiens*）ではありませんから。従って、私の知っている事柄に関して、知識を表明しても気にしないのです。…… R: してみると、このような事柄〔幾何図形〕に関する学問について、それを君が備えているとして、これが知識と呼ばれることを疑いはしないね。A: はい、知者以外のいかなる者にも知識を分かち与えることのないストア派の人々が見逃してくれるなら、疑いません。かの人々が愚者（*stultus*）にさえ認めているそのような事柄に関する把握力を、私が持ち合わせていないというようなことは決してありません。〔*Sol. I-iv-9*〕

と述べる際、このような二分法は顕著である。言い換えれば、*stultus* の自認はこのやりとりに代表されるように、あくまでも論争的文脈に置かれているのであって、探究の端初として設定されているのではない。むしろ、アウグスティヌスにとって、それは *credere* の問題に他ならなかった。

(4) の論点に関して

問題は、『アカデメシア派論駁』第三卷37～44節の哲学史的記述をそれ自体としてどのように評価し、また同書の全体に位置付けるかということであろうと思われる。

私見によれば、この箇所においてなされている「アカデメシア派は、巷間信じられているのとは異なった考えを持っていた」という指摘には、二つの全く異なった文脈に属する論点が含まれているように思われる。それは、

I 「何もかも把握され得ない」という見解は、ストア派に対する「武器」として用いられていたにすぎない。

II 彼らの本当の立場はプラトンの教説であった。

という「対人論法」と「隠された教説」の二つの側面である。後者の論点に関しては、これもまた岡部由紀子氏が既述の確かな指摘をされている。すなわち、「モノローグ部分の最後は、『アカデメシア派がなぜ自説を隠していたか』についてのアウグスティヌスの見解の披歴となっており (III.17.37ff)、その限りで、批判の対象であるアカデメシア派も彼等の『何も見いだされ得ない』という懐疑的主張も、いわば『修正』されていると言えるからである。……だが、重要なのは、このことは、*Conf. Ac.* における批判の対象が漠然としている、ということの意味するのではないということである。……にも拘らず、『隠匿』とか『修正』という、アカデメシア派像にまつわる問題が、この著作での批判の標的……に投影され、或る混乱を生じさせていることが注意されねばならない。」(『アウグスティヌスのアカデメシア派批判』『銀杏学園紀要』第14号 (1990) p.67) つまり、片柳氏の解釈は、まさにこのような混乱をそのまま容認助長するものであるように思われる。

しかし、このような混乱を防ぐために、私なりの提案をしておきたい。それは、何故このような歪んだ哲学史的記述をアウグスティヌスはしたのかということに、十分な資料に基づいた説明を与えることである。さて、以下の C. A. とその他のプロクロスおよびキケローの著作との対照表を見れば、先の I の論点が主としてキケローの著作を典拠としたものであり、II の論点がプロクロスの『プラトーン神学』の冒頭と酷似していることは、一目瞭然であろう。これらの対応のうち、キケローに関するものはアウグスティヌス自身による直接の読解に基づくものであることは言うまでもないが、プロクロスとの類似に関しては説明を要する。プロクロス (410-485) は、アウグスティヌス (354-430) より約半世紀後の生まれであるから、普通には前者か

ら後者への影響は考えにくい。とすればこれら両者の類似は、何か共通の第三者のテキストからの影響によるものと考えるのが妥当であろう。J.Gluckler, *Antiochus and the Late Academy* (1978) pp. 306-322 の推定するように、その第三者として最も考えられるはポルフュリオスであろう。しかし、そのポルフュリオス自身が、アルケシラーオスやカルネアデースを所謂「黄金の鎖」に連なる者と見なしていたとは思われない。これは、アウグスティヌス自身そこで、*mihi videtur* と *dicitur* を違い分け、推測と伝聞の違いを明示しているように、あくまでもアウグスティヌス自身による推測であると思われる。しかし、この推測には或る構造が含まれている。すなわち、懐疑論者の対人論法に含まれている「無主張」「判断の差し控え」が「主張の秘匿」と解され、それがプラトン派の「隠された教説」に結び付けられたのである。それは懐疑論からプラトン主義への移行の過程を、アカデミア派の新プラトン主義的解釈という形で示すものであって、最終的な立場ではない。

アウグスティヌス 『アカデメイア派論駁』第Ⅲ巻	プロクロス『プラトン神学』及 びキケローの著作
<p>[37] では、何故かくも偉大な人々に、真なるものの知はいかなる人にも降り来たらないという考えが、絶え間なき執拗な議論にもかかわらず、妥当すると思われて来たのか。さあ少しの間もっと注意深く、私の知っていることではないが、<u>推察している (existimem)</u> ことを、聞いて欲しい。……</p> <p>プラトンは、……<u>彼が唯一慕う (singulariter dilexerat)</u> その師ソクラテスの死後ピュタゴラス派の人々からもまた多く学んだと<u>言われている</u>。だがピュタゴラスは、……魂は不死であると信じていた。……こうしてプラトンは、倫理的な事柄に関して発揮された<u>ソクラテスの巧妙さと精妙さとを (lepori</u></p>	<p>[C. <i>Rep.</i> I-x-16] ……プラトンは、亡きソクラテスと……ピュタゴラス派の人々及び彼らの信奉とに献身した。こうして、ソクラテスを<u>唯一慕い (unice dilexisset)</u>、全てを彼に捧げんと、<u>語りのソクラテスの巧妙さと精妙さを (leporem Socraticum subtilitatemque sermonis)</u>、ピュタゴラスの玄妙さと数多の学術の厳粛さ</p>

subtilitatieque Socraticae), 私が言及した〔ピュタゴラス派の〕人々から丁重に受け入れた自然的・神的研鑽に結び付け……哲学の完全な体系を作り上げたと言われているが、今はそれを論じるときではない。というのも、私の目下の意向にとって、プラトンが真理そのものが宿る可知的世界と視覚と触覚によって感覚しうる、誰にも明らかな可感的世界の二つの世界を考えていたと言うことだけで充分である。従って、前者は真なる世界であり、後者は、真なる世界に似た、それを型どって作られた世界である。また、前者からは真理が、自らを知る〔知者の〕魂のうちに、精練され、言わば磨き上げられるが、後者からは知識ならぬ臆見が、愚者の魂に生じうるだけである。この世界において、彼が市民的と呼んだ——少数の知者以外には知られない、他の諸々の真なる徳に似た——かの徳に従って、なされたいかなる行為も、「真なるものに似た」という名でしか呼ばれ得ない。

[38] これらのことや他のこのような事柄は、彼の後継者によって、彼らに出来るかぎり秘儀として (pro mysteriis) 保護・保存されたように、私には思われる。……その後、ストア派の始祖ゼノンは、プラトンのかの言わば聖なる学説を安んじて伝授・委任するに値しない者であるが、プラトンが残し、その時点では、

に結び付けた。

[C. *De Orat.* III-67.] ポレモンの弟子アルケンラオスは最初に、様々なプラトンの著作、ソクラテスの対話から何事も感覚にせよ精神にせよ把握され得ないものは、不分明なものであるという考えを取り出し、…極めて巧妙な (lepire) 論議の仕方を採用し、これこそソクラテス的なことに、自分自身の考えることを示す (ostendere) ことなく、誰でも他の人が考えていることを述べるのを論駁する方法を使い始めた…… [Cf. C. *De Fini.* II-1]

Cf. Plot. *Ennead.* 1-6, Plat. *Phaed.* 68d, 82a

[C. *Acad.* II-60] 真理を発見するためには、あらゆる事柄に対する賛否の理由が述べられねばならない、という彼らの主張が残っている。すると、彼らが何を見出したか拝見したいものだ。彼の言うには、我々には事を明示する (ostendere) 習慣はないのということである。では、そのような秘儀 (mysteria) は何のためか、何故諸君は自分達の考えをまるで何か醜悪なものであるかのように、隠す

ポレモンが主宰していた学園にやって来た……

アルケシラオスは、私に思われるには、極めて賢明・有益にも、アカデメイアの考え方を、ちょうど災難が広がっている間、他日誰かに発見されるよう埋めた黄金のように、隠したのである。……

[40] ……というのも彼〔カルネアデス〕はそれが何に似たものであるのか明敏にも知っていて、そして賢明にもそれを隠し、かつこれを「もっともなこと」と呼んだのである。実際、彼はいかにも似像に同意を与えはしても、その範型の方を眺めているからである。だがどうして知者が真なるものに似たものに同意を与えたり、またそれに従って行為したりするだろうか、もし彼が真理そのものが何であるか知らずして、それゆえ彼が偽なることを知り、是認するのは、その内に真なる事柄の賞賛に値する模倣を認める場合である。しかし、このことを言わば秘儀に与らぬ者達に示す (profanis... ostendere) ことは、正しいことでも、たやすいことでもないので、後の人々および出来るならその当時の人々に、その意味を知らせる印を何らか残したのである。……

[41] ……彼〔メトロドロス〕は、「何も把握され得ない」という考えは、ア

のか。……

[P. I-1] かくして、彼〔プラトン〕によって、神聖にして神秘なる仕方で、この教説は輝き出され、聖なる社の内陣深く安全に秘蔵され、そこに立ち入るものも多くからも知られざるまま安置され、定められた周期で、秘儀を執り行うに相応しい生を全うした真なる神官によって開帳されるや、能うかぎり速やかに昇り出て、遍き場所を照らし、至る所で神的な感光を打ち立てる。

これらプラトンの秘儀への参入を媒介する者達であり、我々に神的な事柄につ

カデメイア派の人々に容認されていたのではなく、ストア派の人々をこのような仕方で攻撃する武器として已むを得ず用いられたことを初めて認めた人であると言われている。……

アンティオコスとは、……何か知らない災いをストア派の灰から持ち込んで、プラトンの社の内陣 (*adyta*) を汚した……

このような〔フィロン、アンティオコス、キケロの〕時代から程なくして、彼らのあらゆる〔議論の〕頑迷さ執拗さが絶え果てて、哲学におけるもっとも純粹で燦然たる (*purgatissimum...et lucidissimum*) かのプラトンの顔容が、誤謬の雲を吹き払って、輝き出た (*emicuit*) のは、とりわけプロティノスにおいてであった。彼こそ、同時代に生きているのではないかと人が思うほど、その人に似たプラトン派の哲学者であるが、かくも時代に隔たりがある以上、後者のうちに前者は甦ったと考えるべきである。

[44] Alp. 「……というのも、この我々の対話の巧妙さ (*sermonis lepore*) より、楽しいものが、その意味するところの重みより考えるに値するものが、……果たして見せられ示されることがあるでしょうか。……それゆえ友よ、私にこの議論の答えを求めようとした諸君の期待をより確かな形で、私と一緒に学ぶ方へと向け変えてください。我々は、神の促

いての極めて神聖な積義を打ち明け、彼らの導き手〔プラトン〕と相似た本性の者達こそエジプトの人プロティノスおよび彼からその観想を受け継いだアメリオスとポルフェリオス、そして第三代として、それらの人々より出て、我々が神像にも譬えるイアンプリコスとテオドロス、そしてこれらの人々の後、この神的なコスに唱和して、プラトンの書物についての自分の考えを、デュオニュソスの境地にまで高めた他の人々、そしてこれらの人々から、あらゆる善美なることについての神々に基づく我々の導き手〔アテナイのプルタルコス〕は、真理の最も正統にして純粹な光を汚れなきままに、その心の内奥に受け入れ、我々をして他のあらゆるプラトンの哲学に与らしめ彼よりも前の世代の人々より密かに受け継いだ事柄の共有者となし、特に神的な事の内密なる真理の唱和者としたのである。

しによって真理の奥処 (arcana) そのもの
へと我々を案内してくれる導き手 (dux)
を持っているのですから。」

* * *

討論報告 (司会者)

加藤 信朗

De Beata Vita と共に、回信後の最初の著作である *Contra Academicos* は、カッシキアタム著作群の中だけではなく、アウグスティヌス (以下 A. と略記) の全著作の中で、もっとも難解な著作のひとつであろう。しかし、それだけに、A. の真理探究の起点にかかわるこの著作の読解は A. の全思索の理解のためにきわめて重要である。中川純男、岡部由紀子、神崎繁らの、我が国における A. 研究をになう中堅諸氏により、この著作をめぐる重ねられてきた研究の成果は大きく、それは世界各国の研究の水準に並び、今やその一角を突き破る勢いであることは欣快の至りである。

今回の片柳氏の報告もこれら諸氏の研究をふまえ、これに更に新たな視点を加えようとするものである。それはキケロの『アカデミカ』との対比検討を通じて、A. がアカデミア派と歩みを共にしているところ (自由な研究の態度、自己を不知者とする事) と、袂を分かとうとしているところ (真理が見出され得ないことが *probabile* だとするアカデミア派—真理が見出されることが *probabile* だとする A.) という両面の微妙な分かれ目を、マニ教からの離脱と真理探究への潜心という A. の生涯における一断面に合わせて浮かび上がらせることに成功していると見える。ここで、片柳氏が、A. における真理探究の境位を、無知の薄明のうちにあって知に向かう方向性をもつこととし、これを主として *probabile* という語に依拠して説明したのに対して、質問者神崎繁氏からは、探究の起点は *probabile* にではなく、むしろ、*credere* に置かれるべきではないかという論点が提出された。また、*verisimile* に原型—模像の二世界説を読み込み、*probabile* と *verisimile* を同義とするところから、*probabile* を認めることは原型そのものの知を何らか推定することになるということには A. の *veritatem quaerere* の起点はないとする論点も提出された。岡部由紀子氏からは、*sapiens* において *verum* が知られているということのうちには、不知者のうちにお